

竹福商連携による竹の資源化モデルの開発 —鹿児島県大崎町での実証—

政策・メディア研究科 修士1年
田中 力(1セメ)

どのような社会課題を解決したいのか？

放置竹林の拡大防止

＋

障がい者・高齢者の就業促進



なぜか？



1. 誰の何を幸せにしたいのか

1-1 社会福祉の課題

- ▷ 2050 年に現役世代 1 人で高齢者 1 人を支える肩車型社会へ。
- ▷ 高齢者の7割近くが、65歳を超えても働きたいと願っているのに対して、実際に働いている人は2割にとどまる。
- ▷ 一方、一般就労および福祉的就労をする者は障がい者全体の1割程度、さらに15～64歳の障がい者数377万人の中でも2割強。
- ▷ 働きたいと願う高齢者及び障がい者について、働く機会を創出し、就業促進を図る必要がある。

【田中の思い】

自分が障がい福祉サービスを受けていても、介護を受けていても
人のために役立つことができる就業の仕組みをつくりたい。



1. 誰の何を幸せにしたいのか

1-2 竹利用の方向性

- ▶ 安価な輸入タケノコの増加, 竹製品の利用の減少, さらに担い手の減少などで放置される竹林が増えている。
- ▶ 放置竹林の拡大は, イノシシを始めとした野生鳥獣による農作物被害の拡大につながる。
- ▶ 石油や石炭といった主要な燃料資源が枯渇する可能性がある中、竹資源の有効利用が望まれる。
- ▶ 竹資源の活用には伐採・搬出する費用と, 竹林の産物から得られる収入とを比較して, 利益をあげられる小規模地域での構造となっているかがポイントであり, 低コスト生産・供給体制の構築が必要。



“

障がい者・高齢者の就業促進と放置竹林
の解決を同時に解決できないか？



鹿児島県大崎町におけるステークホルダー



障がい者支援施設(A)

- ・比較的重度な障がい者が利用
- ・サツマイモ栽培の経験あり
- ・より収益性の高い取組を目指す



食品加工事業者

- ・干し芋、葛切り等の製造事業者
- ・地域貢献に意欲あり
- ・福祉事業所の原料を干し芋に加工



障がい者支援施設(B)

- ・比較的軽度な障がい者が利用
- ・サツマイモ栽培の経験なし
- ・竹炭製造に意欲あり



大崎町役場

- ・町広報誌やFM大崎による広報
- ・実証試験全般への支援活動



地元団体

- ・循環型農業を目指す
- ・希望者に活動フィールドを無償提供
- ・無煙炭化器を無償貸与



慶應義塾大学

- ・実証試験の実施、モデル検証
- ・関係者への施策提言

PCCP

- ▷ Philosophy

公助支援を必要とする人々も他の人のために役立つことができる社会

- ▷ Concept

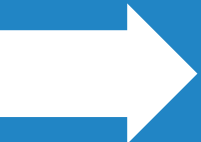
(干し芋を)美味しく食べて竹林整備

- ▷ Contents

竹林・福祉事業所・商(事業者)連携による竹の資源化モデルの開発

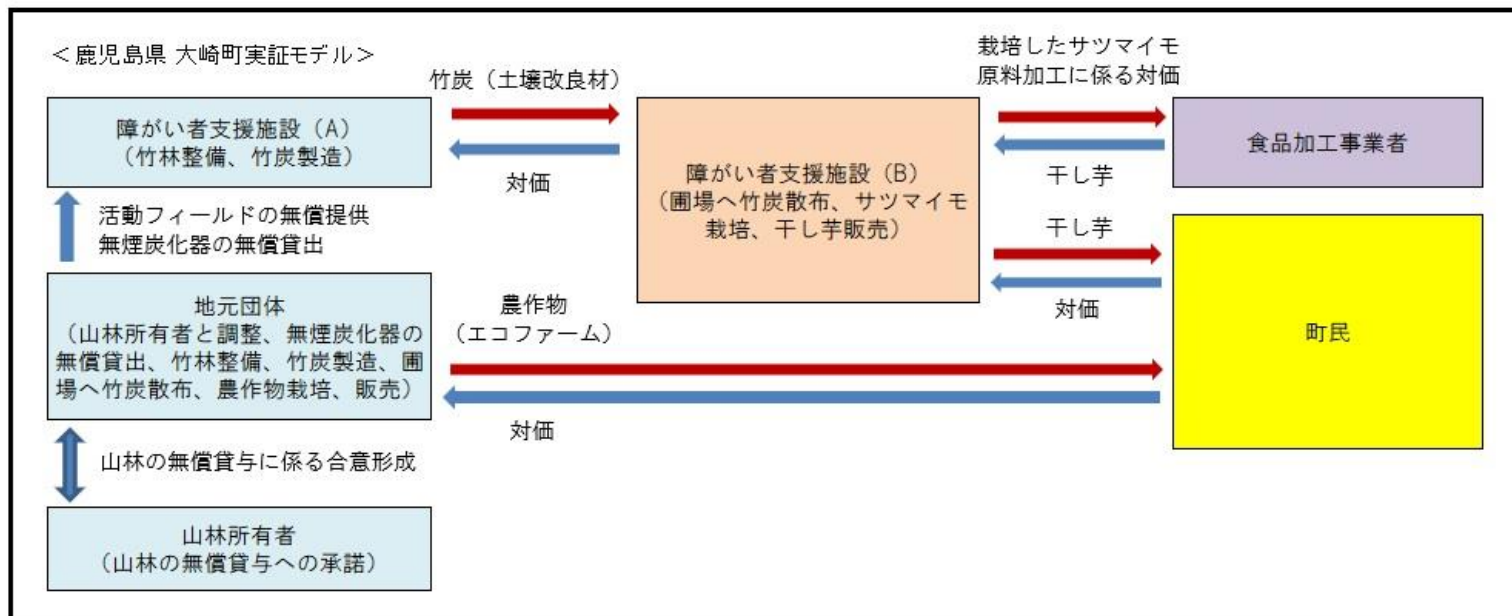
- ▷ Program

竹林整備→竹炭製造→竹炭を圃場に散布
→サツマイモ栽培→干し芋製造→販売



(干し芋を) 美味しく食べて
竹林整備ってどういうこと？

大崎町における実証試験



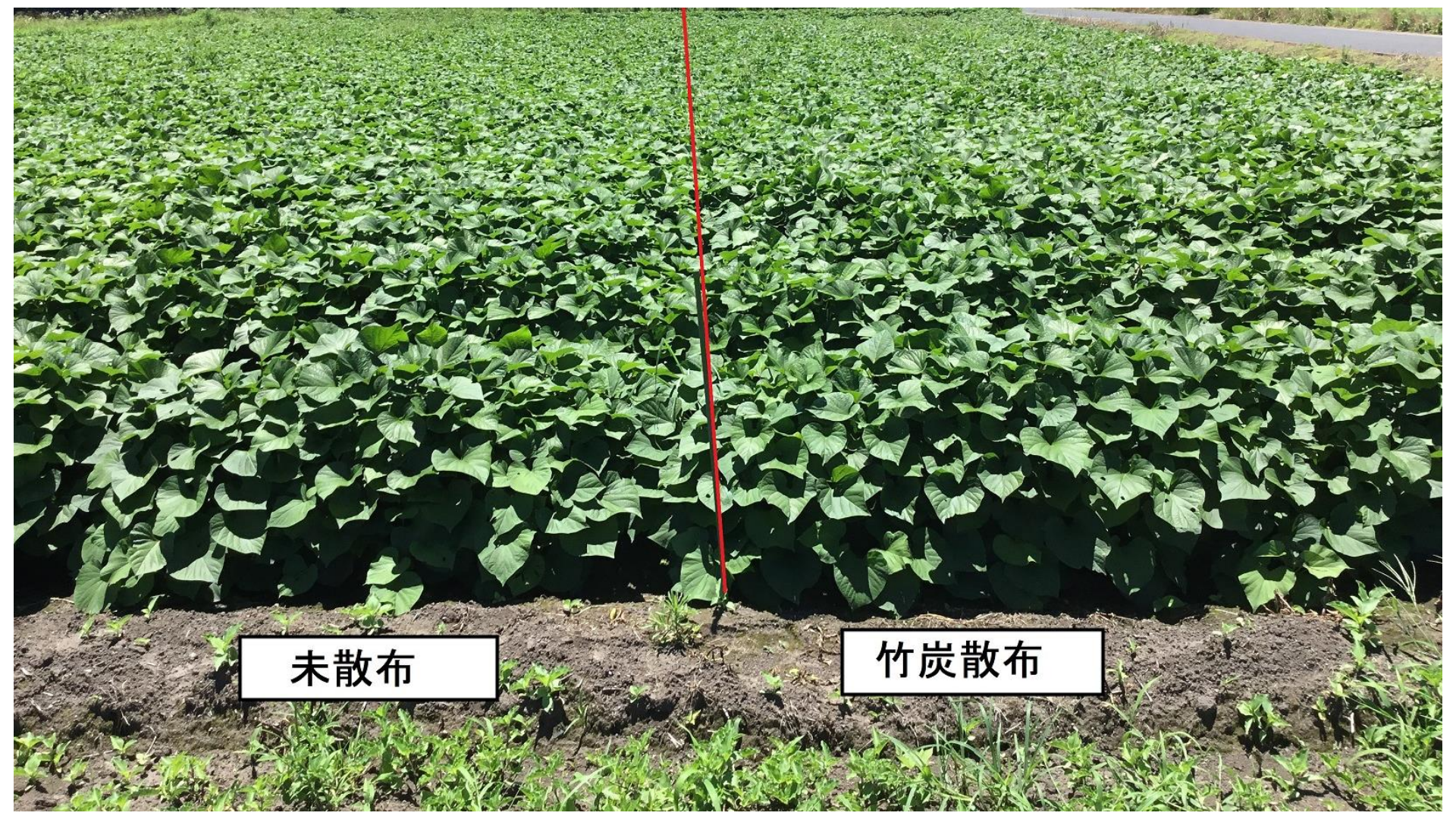
大崎町役場
(企画調整課・農林振興課)

町広報誌やFMおおさき (コミュニティFM局) による広報、実証試験全般への支援活動





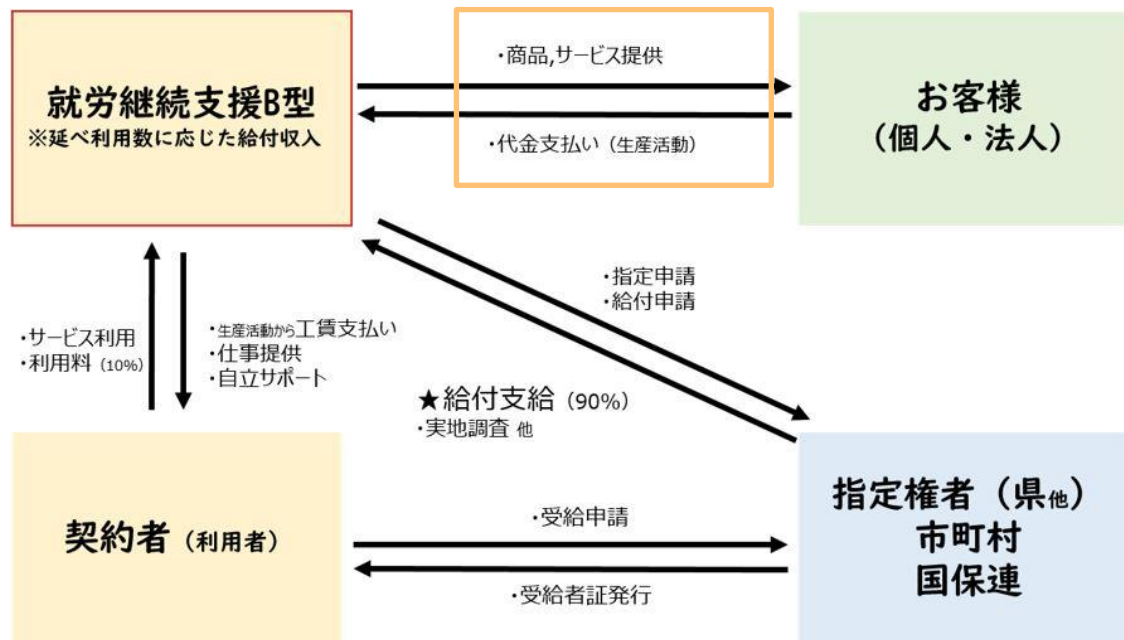




未散布

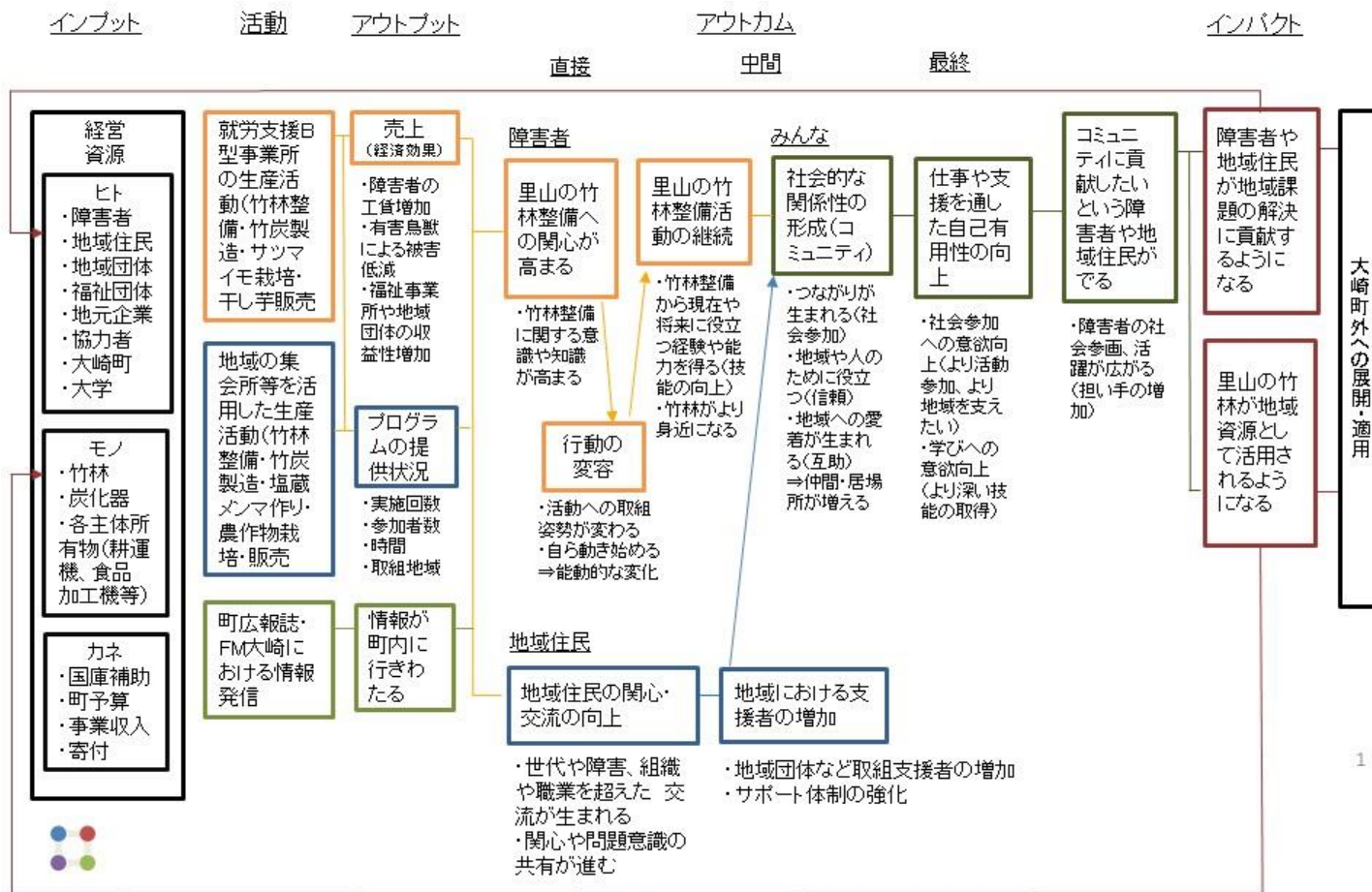
竹炭散布

障がい者支援施設のビジネスモデル



障がい者(利用者)に、いかにB型事業所を利用してもらうか、
いかに商品・サービス提供の収入を上げるかで売上が決まる。

大崎ロジックモデル(竹福商連携による持続可能な竹の資源化モデル)



関係する主体にとってのメリット(win-win関係)

(住民)

- ▷ 厄介者扱いされている放置竹林が資源となる。
- ▷ ひそみ場がなくなり鳥獣被害の減少につながる。

(障がい者・高齢者)

- ▷ 竹林をフィールドに活躍することができるようになる。
- ▷ 新たな仕事や地域を支える機会ができることで、健康増進・生きがいづくりにつながられる。

(食品加工事業者)

- ▷ 通常の経済活動(食品加工)のみで地域課題に貢献できる。





既存の枠組みを活かして
地域課題を連携で乗り越えよう！

ご清聴ありがとうございました。